

【富山】活躍するプラチナナースの共通点「謙虚さと向学心は大切」-中嶋育美・あさひ総合病院 院長補佐らに聞く◆Vol.2

2023年3月24日（金）配信 m3.com地域版

60歳以上の看護師が9人に1人を占めるなか、日本看護協会は定年後も働く看護師を「プラチナナース」と呼び、その活躍を期待する。「あさひ総合病院」（下新川郡朝日町）は現在、60～72歳の9人が多方面で活動。看護部長としてプラチナナースの採用や配置を担った現院長補佐の中嶋育美氏に活躍するプラチナナースの共通点を、看護師の柏紗織氏にプラチナナースの印象を聞いた。（2023年2月10日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



中嶋育美氏（右）と同僚看護師の柏紗織氏（本人提供）

——あさひ総合病院では現在、9人のプラチナナースが働いています。70代の人もいるそうですね。

中嶋 72歳の方がおり、ほかは60代です。この70代の方は私も過去に一緒に働いたことがある、尊敬する先輩です。定年後は病棟で働き、その後、病棟再編によって開設した認知症やせん妄状態の入院患者を対象とする院内デイサービスに配属されました。70歳前で退職しましたが、認知症認定看護師が彼女の人の人柄や仕事ぶりに引かれ、「院内デイでまた働いてくれたら」と希望したので相談したところ、戻ってきてくれました。現在は週に2回、半日ずつ働いています。

柏 私も病棟と一緒に働いていましたが、とても明るく、周囲を和ませてくれる方です。

——中嶋さんはプラチナナースの存在を「いぶし銀」と評しています。巧みな表現だと思いますが、このように輝ける人に共通点はあるのでしょうか。

中嶋 「人柄と仕事ぶりが素晴らしい」という表現に集約されるかもしれませんが、中でも謙虚さや向学心があることは大切だと思います。先述の方の場合、定年後に電子カルテの新しい機能の扱いを学んでもらいました。年齢的に新しいことを覚えるのは難しかったのではと思います。「覚えてくれてありがたいよ」と伝えたら、「いやいや」とスタッフの名を挙げて、「教え方が上手だから」と笑って言っていたことを覚えています。

——柏さんは現在、眼科外来でプラチナナースと一緒に働いています。

中嶋 眼科で働くプラチナナースは2年ほど前、私が看護部長として面談し、入職していただきました。他院で65歳まで勤めてからの応募であり、当院で長く働いていたわけではありませんがとてもしっかりした人で、「十分働けるだろう」と思っただけの判断でした。今も頑張ってる働かれています。

柏 眼科で働くのは初めてとのことだったので、当初は心配しました。眼科は患者さんの回転が速く多忙ですから。本人も「あまりできないよ」と言っていました。実際は仕事の飲み込みが良くてきばきと働き、今では外来の中心メンバーとして私たちとほとんど同じ仕事をしています。私が仕事について相談した際も、「一線を引いた身だから」と言いつつも、自分の意見をしっかりと伝えてくれます。かっこいい先輩です。

——先述の2人はプラチナナースとして活躍している好例だと思いますが、逆に「なかなか難しいだろうな」と思う人は。

中嶋 組織での立ち位置を考えて動けない人は難しいかな、と思います。その人なりの意見があったとしても、病院は個人で回ってはいないので適応力や柔軟性は大切だと思います。

患者さんとトラブルを起こしやすい人もそうですね。仕事がきちんとできていても、かりに言っていることが正論だったとしても、相手への配慮があつてのコミュニケーションは重要です。看護師として相手を思いやり、受け止めること、許すこと。これらができる人とできない人がいるように思います。私が看護部長だったとき、人材は不足していたものの、このあたりを考慮して採用するか否かを検討していました。

——中嶋さんは現在、プラチナナースとして地域で活動しているそうですね。

中嶋 退職前からやりたいことでした。病院が病棟を再編して地域包括ケアシステムの構築を進めようとするなか、「地域のことを知っている看護師が必要だ」と思ったのです。地域を熟知している看護師が病院にいれば、対外的な連携がスムーズに進みやすくなります。そこで、町の保健センターの保健師に当院の看護師が何か貢献できないか相談したところ、「住民への生活指導を一緒に」という話が上がりました。

国は高齢者の重症化予防を推進したい考えですが、全国的に取り組みがあまり進んでいません。そこで、後期高齢者健診で異常が見つかった人をピックアップし、保健師と私が訪問して生活状況を聞き取った後、私と管理栄養士が生活指導をする取り組みを2022年9月に始めました。指導後には3者で情報を共有してカンファレンスを行い、主治医にもフィードバックしています。

病院の外に出てみると、いろいろな発見があります。患者さんの生活に入っていくことで病院では見えづかったその人の課題が浮かびますし、地域を俯瞰的に見やすくなります。これからは若い看護師にもこういった活動を伝えていきたいですね。

——「定年後も働く」をテーマに、2人がいま思うことは。

柏 自分の体力に合わせて働き続けられる仕組みがあるのはありがたいです。年齢やキャリアを重ねることで考えは変わっていくかもしれませんが、定年を機にそこでスパッと患者さんとの関係がなくなってしまうのは寂しい。定年後も緩やかに患者さんと関わり続けられるのはうれしいことだろうと思います。

中嶋 自分の人生を振り返り、深く見つめることが大切ではないでしょうか。業界を問わず、定年まで働いてきた人はさまざまな経験をしています。「これから自分はどうありたいか」というイメージと照らし合わせ、それに合う知識やスキルを自分の過去から探り、引っ張り出していくと良いのではないかと。

例えば、私は長く看護部長を務めてきましたが、できることは管理業務に限りません。30代、40代で得た知識やスキルを今後の人生に生かせるかもしれない。自分のキャリアをひも解きなおし、「これからの自分」にマッチした能力に組み立て直すと世界が広がる可能性があると思います。

私の場合、定年を過ぎても「社会とつながっていたい」「自分を必要としてくれるところで何か役に立ちたい」と思ってきました。こんなふうを考える人は増えていると思うので、年齢を重ねても多様に働ける受け皿がたくさんあるといいな、と思います。

◆中嶋 育美（なかしま・いくみ）氏

1978年富山県立総合衛生学院第一看護学科卒。国立富山病院を経て、1981年あさひ総合病院勤務。2015年から看護部長を務め、2022年からはプラチナナースとして地域で生活指導などを行う。

◆ 柏 紗織 (かしわ・さおり) 氏

2015年富山医療福祉専門学校看護学科卒業、あさひ総合病院に勤務。病棟勤務を経て2021年から眼科外来に在籍。プラチナナースと共に働く。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

